

## 水へ、「ありがとう」

山添村立山添中学校 一年

福山 咲月

私は毎年ゴールデンウィークに田植えのお手伝いをしています。そこで、ふと田んぼの中の水を見て「この水がないと、なえは育たないんだなあ」と思いました。そこで私は、「水」について深く考えてみることにしました。

私の家の田んぼの水は、山から流れてきていったん水をためる場所があり、そこから量を調整しながら流れてくるそうです。そこからはなえが育ち、稲になつてお米ができます。なので私は、毎日おいしいご飯が食べられます。田んぼの中には、カエルやオタマジャクシなどたくさん生き物がいました。また、田植えが終わると用水路で長ぐつを洗ったりバケツにくんで田植え機についているドロをおとしたりします。

田植えの他の農業では、畑が必要です。私の家は畑が多いのでたくさん水が必要です。畑は祖母と祖父がいつも世話をしてもらっています。その季節によつた旬な野菜が食卓にならぶのをいつも楽しみにしています。

私も小学校の低学年の時、学級の畑を使つてお花や野菜を植えたりする係になったことがあります。水をやらないとかれてしまうし、やりすぎてもダメで、夏は朝のうちに水をやりとかなないといけないので大変だったけど、「植物も水を必要としている」ということを学びました。高学年になって、植物の中に水分は約九十パーセントあり、葉っぱから水蒸気となつて出ていくことを知り、ますます必要ということを知りました。「水」は農業で使う以外に飲み水として利

用します。私は、水道の水も使うけど井戸の水をよく使います。井戸水は、すぐくおしいし夏は冷たく冬は温かい水が出てくるそうです。水は、人間の体にとっても必要です。人間の体の中にある水分は約六十〜七十パーセントあり、汗などで体の外に出ていくので水は毎日取り入れないといけません。

井戸水といえば、私は小学校六年生の時に学習発表会で「井戸も掘る医者」という本から劇を作りました。その本の内容は、中村哲という医師が外国の貧しい国へ行き、病人を治療していくなかで、「水」が必要ということに気づきます。その貧しい国は、衛生的な水がなくて川底のどろ水を飲むほど大変なところでした。そこで中村医師は、現地の人に協力をしてもらいながら井戸を掘ることにしました。そうして、安心してきれいな水を飲めて治療もでき、それまで水がなくてひび割れていた大地も緑の大地へと変わっていった。という現実にあったお話です。私はこの本を読んで、「私の身の回りにはいつも『水』があるけど、この国では『水』がなくて苦しんでいるんだ」と思いました。きつとその現

地の人々は「水」のありがたみをよく知っているとと思います。私はそのことを伝えたくて、いっしょうけんめいがんばりました。

そう考えると、「水」はすごく身近にあつてすごく大切だということとなり、生き物にとつてなくてはならない存在です。いつもあたり前のように飲んだり使ったりして、いつも私をささえてくれている「水」。私は水を使う時に「ありがとう」という感謝の気持ちを含めて使っていきたいと思えます。